



はじめての異分野合同プロジェクト
ガイドブック

ver. 1

京都大学学際融合教育研究推進センター

2016

ログ

2016/05/09 発行

2016/05/26 ver.1 のまま誤字脱字等、若干の修正

はじめに

いきなりですが、このようなノウハウやコツなどというものを書くことにためらいをもっています。本冊子では調子に乗ってもっともらしくそれを書き綴っていきますが、本来はそれぞれのやり方があるし、それぞれが苦労しながらそれぞれのやり方をやることが一番良いことではないのか・・・ 異分野融合を語ることは学問を語ることと同値。ゆえに、ここには学問の方法を書いたことにもなるわけですが、そもそも学問には近道する方法などなく、ただただ励み、努める以外にないと言い切ったかつての我が国の偉大な学者の言葉をどうしても思い浮かべてしまいます。

このような想いを踏まえ、本冊子ではツールのようなコツの紹介と同等かそれ以上に対話に向かう姿勢についても述べてあります。なお、いうまでもありませんが本冊子の内容はコツの一案であって、こうすればうまくいくといったハウツーではありません。ぜひともみなさまなりの道（コツ）を模索し、可能であればぜひそれをお教えいただき、本書に加えさせて頂きたい！ そうして、大勢でこの「**異分野が集まって話すときのガイド**」を熟したものにしていければと思っています。

目 次

初期条件	6
STEP 1	7
お互いの差異を知る	7
自己紹介としての研究紹介を安易にしてはいけない	8
参加動機の共有をあなどってはいけない	9
STEP 1のおまけ (その1)	13
STEP 1のおまけ (その2)	15
STEP 1のおまけ (その3)	15
STEP 2	17
たたき台をつくる	17
いきなり絞ってはいけない	18
研究テーマのたたき台はリーダーが作ってはいけない	19
「たたき台」づくりを後回しにしてはいけない	20
STEP 3	25
良いものに仕上げていく	25
チームメンバーだけで閉じていてはいけない	26
やり直しを恐れてはいけない	27
これは研究テーマとして成り立つかなどバカなことを考えてはいけない	28
あとがき	30

本冊子は、京都大学学際融合教育研究推進センターが主体となって実施する「京都大学学際研究着想コンテスト」への申請支援として作成したもの。なお、京都大学学際融合教育研究推進センターの公式冊子であるが、実施担当として当センター所属教員（宮野公樹准教授）個人の認識に基づく。また許可無く本冊子の再配布を禁じます。

初期条件

- 目指しているのは、複数分野の研究者らが集まって一つの研究テーマを生み出すときのガイドの作成。これが正しいというものではないし、これに従えというものでもない。
- 想定しているのは、初対面もふくむメンバー4、5人。いわゆる文科系、理科系といった様々な分野からなる研究者たち。男女混同。全員ほぼ同世代（若手～中堅）。みな、それなりに忙しくそんなに頻繁に会うことはできない。ITリテラシーは高め（SNS等のグループチャットなどでもそこそこ議論できる程度）
- 特に、ぼやっとしたコンセプトからいかにして一つのテーマに絞り込むかがポイントとなるスタート段階から完成度を高めるまでの議論に役立つように3段階に別けて記載。
- この冊子の限界は、チームで生み出した研究テーマを文章やポンチ絵といった紙に落とすところまで踏まえてない点。そこは他書に任せる（参考例：「学生・研究者のための伝わる！学会ポスターのデザイン術」化学同人、「研究発表のためのスライドデザイン」講談社ブルーバックス）また、プロジェクトの実際の進行（進捗管理など）に関してはノータッチ。
- 文中、特に必要なとき以外参考文献はいちいち記載しなかったが、著者の経験や思いよがりだけでないことはここに付記しておきたい。また、参考書は本冊子の主張をより深めるために列挙するとし、担当者である当センター所属教員（宮野）のものとした。
- 内容に関して質問、あるいはコメントいただけるなら、それを加味しながらバージョンアップを続けたい。 @ikiikilab #cpier_book まで。



STEP 1

お互いの差異を知る

そこそこ顔見知りのメンバーだからなんとかなるだろうと

安易に考えてはいませんか？

最初のミーティングで出来る工夫はいくつかあります。

自己紹介としての研究紹介を安易にしてはいけない

異分野が集まって最初の打合せでよくやるのは、各メンバーの研究紹介をしあうこと。しかし、意外にこれは落とし穴です。得てしてそれは異分野に話すことへの配慮やその十分な経験がないため、極めて個別的な研究内容の“説明”になりがちです。その個別的な内容が聞き手の関心対象であればいいのですが、そうでない場合は（多くはそうですが）、聞き手はなかなかその内容に興味関心を抱きにくい。研究内容に興味関心を抱きにくければ、その研究をやっている「人物」にも関心を持ちにくくなります。そして、この人物への興味関心の薄れはその後の議論における熟度とも深く関連してくることは容易に想像できます。

異なる文化をもつメンバーが協働でやっていくには、その議論内容、作業内容はともかく、何においても良好な人間関係（←必ずしも仲良しでなければいけないということではありません。ドライな関係でも信頼があれば）が基盤的に存在しなければならないのに……。結局、安易な個別研究の紹介は関心を持てるかどうかの「当たり外れ」の問題になるのです。これを避けるためにもこのファーストコンタクトとなる自己紹介の場面にはきっちりこだわりたいところ。よくある研究紹介ではなく、例えば、下記の4つの質問を使ってはどうでしょうか。

- チームに参加した理由（動機）
- わたしはこんな経験（これまでの研究経緯）があります！
- わたしはこんなことができますよ！（提供可能な知見や技術）
- わたしが苦手なのはこんなことです（不得意なこと）

ここでもポイントは今現在の研究を中心に自己紹介をしないことです。今日の我々は「今」というものを強く意識する通念をもっています。今やっている研究は今やっているだけであってその人物すべてではない。融合の対話のためには「今やっていること」よりもその「人格」のほうが大事でしょう。

参加動機の共有をあなどってはいけない

先の異分野の4つの質問のうち、実は、もっとも重要なのは「参加動機」です。いうまでもありませんが、これから議論を重ねるメンバーがそれぞれ何を目的にしているのか・・・これを知らずして実のある議論には決してなりません。例えば、

- Aタイプ：掲げようとしているその研究テーマに本当に関心があっ
ていろんな分野の人たちと本気で突き詰めた人
- Bタイプ：誘われてなんかおもしろそうな話だったから参画した人
- Cタイプ：〇〇さんが誘ってくれたからとにかく参画した人
- Dタイプ：自由に使える賞金を目当てに参画した人
- Eタイプ：コンテストのネタで論文作成や研究助成金獲得を見込んで参
画した人

などなど。今回のメンバーはどんなタイプの人がどのくらいいるのかについて、言い出しっぺ（≒リーダー）だけでなく全員が知っておくことはその後の議論の質に大きく関係します。人は誰も自分が良いとおもった発言、行動しかしません。言い換えると、外から何をいわれようが自分が良いとおもったことしか行動に移さないということです。チーム内で優れた研究テーマを生み出すには各自が行動（努力、あるいは成長）をする必要があります、その行動を結集させるためにも参加動機、あるいは各自の望みの共有は必須でしょう。

なお、単に参加動機をさらっと言い合うだけでは不十分です。みなで意見交換を行いしっかりと深掘りしておくことが大事です。例えば、Aタイプの人には、なにをどこまで探求したいと思うのか、そもそもなぜそれを探求したいとおもっているのか、しかもなぜ異分野チームで探求しなければいけないのか、探求したらなんなのか。Bタイプの人には、どこがどうおもしろいと感じたのか、それはなぜか、もしもどこかが違っていたら参画しなかったか、ほんとうに「おもしろい」というだけで参画を決めたの

か、何か他の要因は関係していないのか。C タイプの人には、〇〇さんに何を期待しているのか、もし〇〇さんが違う言い方で誘っていたら参画をやめたりしたでしょうか、あるいはまったく同じテーマで別の人から誘われたら参画するでしょうか。このように研究テーマあるいは人への熱意をみんなまで確認する対話作業は、そもそもの研究テーマに対してどうしても生じてしまっている温度差を解消し、むしろ熱意を高める方向に変えるでしょう。

仮に、メンバーにDタイプの人が多かったとしても、それはそれで問題ありません。その目的のためがんばればいい。ただその場合でも、例えばその賞金がいくら以下だったら参画しなかったのか、もし賞金がなかったら本当に参画しないのか、などなど詳細に検討することが必要です。また、Eタイプの場合は、どの雑誌に投稿するのか、どの助成金に応募するのかまでも話し合うことが大事でしょう。ただしご注意願いたいのは、今回のコンテストの趣旨の一つに「論文や学会という枠を超えたところで、どうしようもなく問わずにはいられないテーマを支援する」ことがあります。科研費などに出せるようなテーマはことごとく書面審査にて文字どおり「科研費に出せばいい」というコメントが返ってきますよ。

いうまでもなく、参加動機についての徹底的な議論はそのチームにおけるしっかりした共通目標を作ることに繋がります。その共通目標はおのずとそのチームでの共通言語へと具現化されるでしょう。例えば、一般的に「真理探究」や「社会変革」といった単語一つとってもその内実の受け止め方が異なりますが、目標がしっかり共有されていれば齟齬を最小限におさえつつ着実に議論を進めていけることでしょう。

異分野合同チームでは専門分野間で「言葉」が違うため議論が難しいとよくいわれますが、実はそれを乗り越えるためにはもう一つの「言葉」が大事なのです。それは共通目標の認識にともなって生まれる言葉、チームメンバーだけで通じる合い言葉や方言のような親近感ある言葉です。専門の壁を越える（テクニカルな）言葉とこの人間の壁を超える（ハートフルな）言葉。特に後者の言葉こそが基盤にあるべきであり、その言葉による志といってもいい熱意の共有こそが異分野合同チームの原点だと思います。

異分野「連携」をしてはいけない

今回の学際コンテストの応募において、複数分野の知識や知見をツールの使って何かを生み出すことが本当の目的ではありません。それは異分野「連携」です。大学という場で大学研究者が集まるからには、異分野「融合」を目指さないと意味がありません。異分野連携はチームを組んで何かをアウトプットするものであるとしたら、異分野融合とは個々人のインプット、探求をもとめる意思に従う自己変容、すなわち成長の事です。そういう構えをもつ研究者が集まれば、いや、集まらなければ、部品を組み合わせたような学際的な研究テーマが生まれるだけです。繰り返しますが、それは異分野連携であって融合ではない。連携は「あとはとっとやればいいだけ」の話です（それすら出来てない現状も筆者は認めますが。なお、連携をうまくいかせるためには、徹底的な目標の共有、明確な役割分担、進捗状況のこまめな確認による軌道修正など、いわゆる管理（マネジメント）をしっかりとやればいいのかと思います。決して管理を軽視しているわけではありません。管理を本気でやっているかを問うています）。

融合による研究テーマの創作は、本来的にメンバー間の衝突を経るものです。たとえば、知らず知らずに自分をもってしまっている思考の仕方を絶対なものとしていては成長は（融合は）ありえません。思考の仕方や思考の前提となっている固定概念をいったんさらけ出す。それはきっと各自で異なる。ゆえに衝突、というわけです。そのぶつかりあいを通じて各自が善と思っていたことを自分でも問い直し、みんなと対話してみんなでも問い直すのです。そのように一度破壊して再構築した結果が「みんなでつくった研究テーマ」、すなわち連携ではない融合したテーマ、となるわけです。この営みは別に特別なことではなく、学問をやる人間にとってあたりまえのことですし、偉大な先人たちがずっとやってきたことです（しかし実は、それが失われているのではないかという危惧が、この学際コンテストをやるに至った理由の一つです）。そして、そういう営みを通過したことを感じさせてくれる研究テーマが、やはりコンテスト本番で入賞していま

す。書面審査員は肩書きで選ぶなどせず、この人の意見なら信頼に足ると
いう方をキュレーターが集めております。審査員らもすでに4年目。みな
目が肥えてきていますよ。

さて、STEP1では、最初のミーティングにおける心得について書いてき
ましたが、結局のところもっとも大事なものは、各メンバーがミーティング
に臨むときの姿勢、もっというなら異分野融合（=自己成長）に対する構
えをもつための頭づくりが必要ということです。それゆえに、**本冊子は言
い出しっぺ（≒チームリーダー）だけでなくメンバー全員に読んでもらって
から初回のミーティングに挑む**ことをおすすめしたいです。

さらに詳しく知りたい方は・・・

「異分野融合、実践と思想のあいだ。」京大国際融合教育研究推進センター
<http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/?p=7268>（ユニオンエー社から購入可能）の
第二部「異分野融合の思想」に記述があります。

STEP 1のおまけ（その1）

異分野の研究者と合同で何かをやるのが初めての方は、例えば、16ページにある「**学術文化比較のための20の質問**」を試してみてもいいかもしれません。これは、学際融合教育研究推進センターで実施している「学術分野の比較大調査」の質問から20個を抜粋したものです（Webサイト <https://survey2015.symposium-hp.jp/> 調査継続中！ぜひアンケート回答にご協力を！回答率が目標に達すれば結果は完全公開します！）。やりかたは16ページを人数分印刷し、5分程度で記入してもらうだけ。その後、その結果を見せあって自由に議論するのです。



(会話の例)

- あなたとあなた、形が全然違うよね。これどういうこと？
- なぜ、あなたは「・・・が・・・」だと強く思うの？ それ、私からしたら信じられないのだけど
- え！私とあなた。分野はまったく違うのに、形はこんなに似てるんだー！

このアンケートを使えば、個別研究の話を経由しなくても一気にお互いの思考フレームの域で対話することができます。各自が育ってきた研究分野がもつ独特の思考の癖。癖というものは自分で気づきにくいですが、このアンケートによってそれがつまびらかになるのです。これこそが、異分野合同プロジェクトの神髄！ そして、これこそが本コンテストのねらいです。

STEP 1のおまけ（その2）

いうまでもなく、ミーティングのログをとっておくことはあとあと便利でしょう。毎回のミーティングをまとめる必要はありません。それは無駄なことです。とにかく記録しておけば OK です。そのログがたまっていくにつれ、協働感がメンバーに高まっていくことでしょう。

ログのためには、SNSなどでグループなどをつくるのが便利です。Facebookでも、Evernoteでも、Slackでも、チャットワークでも、ファイル共有できるものがベターだと思います。直接参加のミーティング以外でもWEB上で意見交換できるのは便利です。ただし、WEB上での議論はメンバー間の差がでやすい。沢山書き込む人とそうでない人がでてくるようであれば、WEBでのやりとりはログだけにとどめておいた方がいいかもしれません。くれぐれもWEBに頼りすぎぬよう。なかなか実際に人が集まって議論することは難しいかも知れませんが、ランチミーティングにするなどなんとか時間をみつけ、せめて30分でも肉弾戦をやったほうが、3時間のWEBミーティングよりも意義はあるとおもいます。

STEP 1のおまけ（その3）

いうまでもありませんが、よく発言する人もいますしじっくり話を咀嚼してから発言する人もいます。ミーティングのコツは、頻繁に発言することが大事！と「思わない」ことです。発言していない＝考えてない、ではありません。そう考えてミーティングに臨めば、また違った議論進行になるのではないのでしょうか。

私は、分野です。

- 4: とても当てはまる
- 3: まあ当てはまる
- 2: まあ当てはまらない
- 1: 全く当てはまらない

世界観

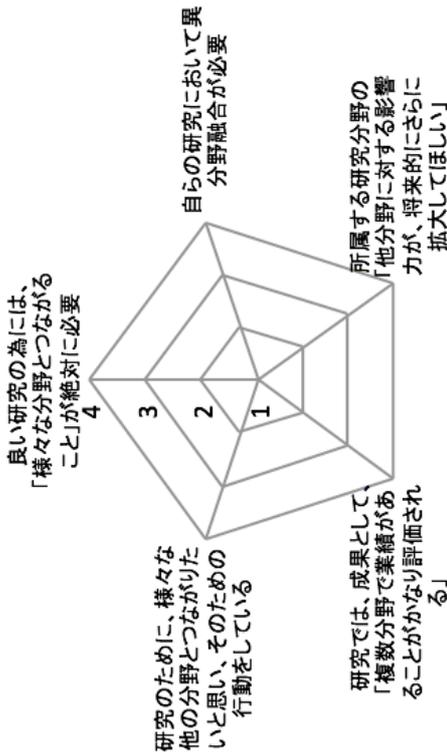
世界には、「全ての事象を説明できる絶対的な法則がある」

世界とは、「完全に実在しており自分が知覚した現象は実際にそれが在ることに他ならない」

世界とは、「完全に概念的なものであり自分が知覚した現象はそのまま本当に「在る」かどうかはわからない」

世界とは、「完全に要素機能(部品)から構成されたものである」

世界とは、「完全に有機的な生命体である」



研究とチーム

良い研究の為に、個人でコツコツと取り組み深く考えることがすごく大事な

指導教員とは師匠的存在であって、共同研究者のようなフラットな関係ではない

研究する際に、1人でなく研究を手伝ってくれる技術補佐員的な人的資源が必須である

良い研究の為に、個人でいろいろな考えのやりとりも、とにかく他者と活発に議論することである

研究は、基本的に研究者2人以上のチームで行う(担当教員除く)

研究の価値

研究の価値は、「新しいもの・概念を生み出すこと」こそあるべき

価値中立的な科学的研究は分野を問わず可能である

研究の価値は、「社会課題の解決」こそあるべき

研究の価値は、「深い理解に到達すること」こそあるべき

研究の価値は、「成果を活用してインパクトを与えること」こそあるべき



STEP 2

たたき台をつくる

人間関係の下地をつくる時間を経たら、次はだんだん具体的に
研究テーマをつくる段階に移るでしょう。
そのときに大事なのがたたき台をつくる作業です。

いきなり絞ってはいけない

みなさん、「あ。今、議論が拡散（発散）してる・・・」と感じた経験はないでしょうか？ この拡散は決して悪者ではありません。むしろ拡散しきってあらゆる議論のネタをだしきることが大事です。要はその後にまた収縮していけばいいのです。議論は、拡散→収縮→拡散→収縮を繰り返しながら熟度が増していくものですから。

以下、収縮のさせ方の一案を紹介します。議論が拡散しているときはおそらくホワイトボードにたくさんの書き込みが乱雑に書かれていることでしょう。そのホワイトボードをみなで一步退いて眺め、「この意見はいいね」「これは検討に値するね」「これは目指すところにあってるね」といった書き込みの場所に赤シール、「これはちょっと関係ないよな」「これは今回のものに含めるとコンセプトが広がりすぎになるな」といった書き込みの場所に青シールを貼る方法です。もちろん、シールはなくても正の字を書いていくのでもかまいません（ミーティング中の休憩の時間と併せてこの投票作業をすることも効果的です）。特に大事なのは各自が少し客観的に議論を振り返る静かな時間をもつことです。そうしてみんなで投票したあと、投票結果をみんなで検討するという形でミーティングを再開すれば、議論内容はある程度収縮しながらきつと新たな展開に移行していくことでしょう。

研究テーマのたたき台はリーダーが作ってはいけない

「よし、今日はここまでにしますか。私、帰宅してからこのホワイトボードとか思い出しながら一度たたき台のポンチ絵を作るので、それをみなさんに投げますからまたコメントくださいね」という言い出しっぺ（≡リーダー）のありがちな台詞は要注意です。その理由は3つ。

1つ目は「協働にならない」ということ。最初のたたき台をリーダーがやってしまうと、今後ついついなにかとリーダーを頼るようになります。リーダーばかりの負担が多くなってリーダー自身が不満をもつようになるかもしれませんし、なによりそれでは協働とは言えずリーダー以外が当事者意識をもちにくくなります。これは融合、すなわち各自が成長することと真逆です。

2つ目は、「大きすぎる影響」です。段取り八分という言葉があるように、最初のたたき台が今後の議論の流れを決定づけるといっても過言ではありません。人は、ほぼ完成形を一度見てしまうとそのイメージに強く縛られてしまい、それを超えた議論が展開しにくくなる傾向にあります。加えて、「せっかく作ったのだから」という思いも加わって大幅な修正がますますしにくくなります。こういった意味で最初のたたき台をリーダー一人で作るのは危険なことなのです。

3つ目は「成長機会の喪失」です。ゼロから最初のたたき台を作る作業は大変な苦勞を要します。ぼやっとしたコンセプトを具現化していく作業はああでもないこうでもないという頭と手の両方を動かし、汗をかきながらなんとかしぼりだして創作するものです。そしてこのときの生みの苦勞こそが一番成長につながります。その成長機会をリーダーが独り占めせず、他のメンバーの成長のことも考えたほうがいい。

そこで、「では、次回までに各自がたたき台のポンチ絵をつくり、それを持ち寄って議論しましょう」という提案をおすすめします。大勢に努力（苦勞？）を強いることにはなりますが STEP 1でも示したように融合とは成長であるという認識がメンバーで共有されていたならば、このリーダーの発言はまっとうなものとして受け入れられることでしょう。

「たたき台」づくりを後回しにしてはいけない

ポンチ絵完成までの一般的なプロセスは、とにかくメンバー間で議論を重ね、その後、誰か一人（おそらくリーダー）がたたき台を作り、他のメンバーはコメンテーター的に意見を言い、さらにまたリーダーが作り直していく……といったものでしょう。先に、「ポンチ絵作成はリーダー一人ではなく全員でやったほうがよい」と述べましたが、ここではそのポンチ絵作りをできるだけ議論の初期段階からやることを提案します。つまり、

粗々の議論でも、とにかく全員が「たたき台」を作って持ち寄る
(例えば、第二回目のミーティング時には各自がポンチ絵提出)

↓

みんなでみんなのたたき台を叩く

↓

必要に応じ再度各自がまたたたき台 ver2 を作って
次のミーティングに持ち寄る

といった順番です。この順番はミーティングに参加するすべてのメンバーが主体的になるためにとっても大事なことです。実際に顔を合わせて対話することはとても大事ですが、それをより意義あるものにするためには参加者各自の姿勢やコミットメントが必須であることはいうまでもありません（著者自身の感想ですが、今日、対話！対話！と世間はやたらと騒いでいるように思います。しかしどうも対話に頼りすぎています。まるで対話こそが大事で対話すればうまくいくというような）。決して対話を否定しているのではなく、先立つものとしてその対話の場に挑む個々人の構えや準備こそが対話の質を決めるのだと思うのです。そしてその準備や構えを持つことにつながるのが「たたき台の制作」という作業です。

得てして、研究テーマをみんなで考えるという目的のミーティングは、

発案者＝リーダー＝お世話役のように考えがちです。結果的にリーダー以外のメンバーはコメンテーター、あるいはお客様のようになり、ミーティングに参加するときは体も心も「手ぶら」の状態・・・リーダー以外がこのようなお客さん思考では良い考えが浮かばないどころか、議論は二転三転、右往左往し余計に時間がかかることになるでしょう（あるいは、リーダーの案をそのまま OK として、とても早く完成に至るかのどちらか）。これを避けるためにも、たたき台の作成を早い段階で、しかも全員で始めることはとても効果的です。

以上、形式的な対話のコツについて述べましたが、いうまでもなく本当に大事なのは対話の中身です。中身の深め方というものはなかなか書いて伝えられるものではありませんが（それは「自分で考える」ということを教えられないのと同じだから）、ただやはり、考えを深めるときに有力な方法は「問いかけ」であると思います。

問いを発するのは他者からでも自分自身でもよいですが、少しでもその問いかけに貢献できるよう、次ページ以降に質問リストを2つ記載いたしました。これらは順に『研究発表のためのスライドデザイン』第一部、および『研究を深める5つの問い』第二章「あなたの本当の目的はなんですか」（いずれも講談社ブルーバックス）

<http://bookclub.kodansha.co.jp/search?code=bluebacks&order=1&kw=%E5%AE%AE%E9%87%8E%E5%85%AC%E6%A8%B9>

からの引用です。これらの質問は、今回の「異分野が合同で研究テーマをつくる」という目的とは異なる文脈でつくられたためにうまくマッチしないのもあるかと思いますが、一読しておくことに損はないと思います。

第1部 「わかりやすい」スライド構成にするために

実験方法に関する問いかけ

オリジナリティはあるか？

- その実験方法はスライドに載せる必要があるのか？
- どこにでもある実験装置なのか？
それとも独自に開発したものなのか？
- その方法は一般的なものなのか？
それとも独自色が強いものなのか？

客観的・論理的か？

- その実験方法（または材料）を選んだ理由は？
- その実験方法で本当に知りたいことがわかるのか？
他の方法と比較した結果がその方法なのか？
- 今回、その装置のスペックを掲載する必要があるか？ ない？
- 今回、装置のメーカー名を掲載する必要があるか？ ない？
- そこまで詳細な方法を説明する必要があるのか？

正確か？

- ちゃんとプロセスすべてを網羅している？
- 計測誤差は考慮している？
- 薬品の名前、量も正確に掲載している？
- データの参照先は掲載したのか？



背景・目的に関する問いかけ

オリジナリティはあるか？

- どこに独創性があるのか？
- その問題（目的）は、ほんとに未解明なのか？
- 問題設定そのものが新しいのか？ アプローチ方法が新しいのか？
- 他の類似研究との関係は？
- 先行研究とどこがどう変わったのか？

客観的・論理的か？

- 背景の説明が聴衆のレベルと合っている？
- その研究をやる必要性は？ 有効性は？
- 本当にその応用展開につながると思っている？
- その緒言の内容と今回の研究目的はつながっている？
- その問題（目的）と実際にやること（手法）がずれてない？
- 結局、「何の問題をどう解くのか」を一言で説明できる？

正確か？

- 「○○」と主張しているが、それは本当か？ 根拠はある？
- 「○○」と主張しているが、本当にそれだけ？
他にもあるのでは？
- 数少ない根拠で問題設定をしていない？
- 解決しようとしていることは問題の一部なのか？
あるいは全部なのか？



あなたの研究において掲げている目標はなんですか？

()

それは、さまざまな現象を説明しうる根源的なものに触れるような、いわゆる本質的な目標ですか？

()

個別的な狭い領域における目標（テーマ）になっていませんか？

()

あなたの研究の目標が達成されれば、なにがどこまで進んだことになるのですか？

()

あなたの研究で掲げる問題は、本当の問題ですか？

()

すなわち、それが解決されれば、時間や空間を越えて大勢に影響をおよぼすような普遍的な知をもたらすものですか？

()

課題解決は何年先を想定していますか？

()

もし研究が進んだら本当にその課題は解決するのですか？

()

課題解決に他の研究が成果を上げることも必要であるなら、それらをすべて把握
していますか？

()

独りよがりの課題設定になっていませんか？

()



STEP 3

良いものに仕上げていく

一応のポンチ絵が完成したなら、次はそれのブラッシュアップ！
そのためのコツを3つ列挙します。

チームメンバーだけで閉じてはいけない

いうまでもなく、完成度を高めるためにはメンバー以外の多数の人に見てもらいコメントをもらうことが極めて有効。ただしその際に、漠然と「ご意見をお聞かせください」とお願いするよりも、少しお願いの仕方に工夫をすれば本当に意味あるコメントを引き出すことができます。

その方法は「見た目」と「中身」の2種類にわけてコメントを求めることです。第一段階の「見た目」に関しては、ポンチ絵制作側の口頭説明は一切くわえずにポンチ絵だけを見てもらって「何をめざし、どんなことをする内容だと読み取りましたか？ あなたの言葉で説明してくれませんか」、さらに「このテーマを一言で説明するとしたらいうならどんなフレーズになりますか？」とたずねます。これにより、「まず読み手にはどのように理解されるのか」を知ることが出来ます。もし得られたコメントが制作側の意図したものと異なっていれば、それはポンチ絵でうまく伝えることができているということになります。当コンテストは第一次審査として書面審査を行いますので、口頭説明なしで正しく受け取ってもらえるというのは勝負どころです。見て読んでもらっただけでのコメントを一通り聞いたあとで、制作側から「実は、我々はこんなことがしたいのです」と研究テーマの補足説明をしてください。その後、「え？そんな内容だったの？ポンチ絵だけ読むと全然ちがう内容と感じたよ・・・」と言われたならしめたもの。そのポンチ絵の改良ポイントが明らかになったということです。

さて、その次の「中身」の段階は、いよいよ「具体的なポンチ絵の中身、研究内容についてどんなご意見でもお聞かせください」とたずねます。これはよくある一般的なコメントを求める作業と同じです。おそらく、その人の専門的知識や経験から、研究内容に関してコメントをしてくれるでしょう。

やり直しを恐れてはいけない

著者はキュレーターとしてこれまで3回のコンテストに関わってきました。非常におもしろいのはキュレーターとの相談を重ねてガラッと変わる研究テーマもあれば、全然変わらないものもあるということです。

もちろん変わった方がいい、変わらないのはダメだといいたいのではありません。変わらないのは変える必要がないと判断したからでしょう。ただし「自分たちの考えた作品を信じる気持ちが強いに越したことはないが、それは同時に、聞く耳を持たない頑固さの裏腹でもある」という認識がなければ、意味あるディスカッションにはなりません。孔子がいうように、学問というのはそれをやればやるほど柔軟になるもの。堅くなっていませんか？変化（成長）を避けていませんか？ 繰り返しますが、変わらないことをダメと否定しているわけではありません。変わるものは変わりますし、変わらないものは変わりません。あなたにとって変わるものは何で、変わらないものは何ですか？ このような内省から得た自覚が大事であろうと思うのです。

蛇足的に付け加えますが、改善が必要なそのときにこれまでやってきた努力が無駄になることを惜しんで作品をあまり直さないのは完全に NG。手間を惜しんで成長機会を逃すことは学者の道に反します。

これは研究テーマとして成り立つかなどバカなことを考えてはいけない

確かに本コンテストは「研究テーマ」の熟度を競い合うものです。しかしそれは結果的に、いや意図的にいわゆる“研究”(従来の研究)の体裁や枠組みから外れたものになるでしょう。そのくらい現状の研究というものは細分化され閉ざされた箱に入っているようなものだと本コンテストの主体者らは考えています。もちろんこれまでの研究というものがあって今の我々が在るわけであり、その積み重ねや歴史を軽視するものではありません。しかし、それらへの敬意を考慮してもなお、現状の形式主義や成果主義は目に余るものがあると思うのです。“研究”として成り立つか?という考えは、論文になるかどうか、学会発表できるかどうかといった打算的損得勘定が見え隠れします。それこそがサラリーマンと化した研究者のすることであって学者精神とはほど遠く学問とは一切関係ないことです(サラリーマンを悪くいうつもりはなく、本来の学者の生き様の話をしているだけです)。本コンテストでは論文にならないからといってその研究テーマを手放せる程度の「問い」は求めています。業績獲得や形式制度を超えたところで、どうしてもこれだけは抱いてしまうという問い、言い換えるなら一生もののテーマ(研究テーマというより学問テーマといったほうがいいかもしれません)のようなものを求めます。

いわゆる新規性というものを強く意識してテーマを構想しなくともよいです。そもそも真理や本質というものは、時代や場所、そして人を超えても変わらざるからこそそれなのでしょう。であれば、新しさがあるかとかないとかいう時間軸にそった評価は本来的にいえば少しおかしな話です。一つの答えはないであろう永遠の問いを噛みしめ続けること(こそ)がほんとうに大事なこと、学問の使命と考えます。もちろん今を生きる人間が直面している事柄(または課題)を切り口として根本へとたどるのはまっとうな思考です。ただ、根本にもつながらずただ単に今抱えている束の間の問題をおいかけるのは学問でもなんでもありません。学者が政策や政治、一般社会で働く人の仕事を奪ってはいけません。

加えて、いわゆる学際性というものもあまりにアピールしなくても結構です。そもそもこの世に融合してないものなどないのですから。必要に応じて（求める問いの文脈において）適宜主張していただければいいことであると考えます。何かを探求しようとするれば、例えば〇〇学といった専門領域のみで到達しえないことは、ことさらいまでもない学者の常識。謙虚さともいえるこの常識（構え）が自ずと他分野を求め、対話し、衝突し、変化（融合）し、関わった学者を成長させるのでしょう。今回このような冊子を作成いたしました。このように結局のところは、学者が学者として普通の仕事をちゃんとすればいい、という事に落ち着きます（ゆえに、わざわざこのような冊子を作る意味はあるのかと考えてしまい、そのためらいが「はじめに」にて文章として現れてしまったという次第です）。

今回、第四回目となる2016年学際研究着想コンテストでは、過去の本コンテストにおいて最終審査まで勝ち上がったチームのポンチ絵を当センターホームページにて公開しております。これらはあくまでイメージとして参考にして頂きたいものであって、そのタイトルや内容を見て「ああ、こういう感じならOKか」などと判断されることのなきよう、何卒お願い申し上げます。

あとがき

本冊子では、特に STEP 3 においてあえて押し付けがましく青臭い理想論を書かせて頂きました。激しく制度化が進んだ今日の学术界においても、ポストモダンの考え方をもつ方々においても、前述の文章は大学で働こうとして働いている研究者なら心のどこかで少しはもっている学問観ではないでしょうか。繰り返しになりますが、今、我々は制度化、細分化、商業化が進行した学术界において共通の学問観をもちにくくなっており、そのことが一層制度化、細分化、商業化の進行を進めているように思います。異分野間の対話は、少なくとも上（目標）か下（根本）かのどちらかが共通しないと、その中間において各分野が個別的に浮遊するだけになり決して議論として成り立ちません。であるからこそ理想像といわれようが、研究者ならきつと純粋な学問精神が必ずあると信じてそれを堂々と掲げ、それを共通目標として異分野融合（成長）するしかない・・・その舞台が本コンテストであり、現学术界に対する抗いでもあるのです。

みなさまがこのコンテストを通じ、
学者としての成長実感を得られますよう。